

竹中 いや、後から詳しく話しますけど、それは私が考えたことではなく、当時からコンピュータを駆使して、何とか働いて自立しようとしていたチャレンジドの方から教えてもらったんです。実は私はパソコン苦手なんですよ(笑)。

皆の力を合わせれば 新しい社会をつくれる

竹中 ところで、政代さんが取り組んでいるiPS細胞を使った網膜の治療はいまどこまで進んでいるのですか。

高橋 ここ最近の動きでは、二〇一四年に患者さん本人のiPS細胞を使った治療に成功し、いまは他人のiPS細胞を使った治療に取り組んでいます。でも、それを実際の治療への道がすぐ開けるといふわけでなく、まず他人のiPS細胞を使った治療で拒絶反応が起これば、「安全です」ということを示した段階なんです。これからの本当の治療づくりになります。

竹中 これからが本番だと。

高橋 ただ、iPS細胞を使った治療の研究は、いま現場の研究者がそれぞれのところできちんとやってくれていて、実は私はあんま

り関わってはいないんですね。

じゃあ何をやっているかというのと、神戸アイセンターで社会科学系の仕事に取り組んでいるんです。例えば、開発が進む自動運転車、どうすれば視覚障がい者の方が特例的、優先的に使えるようになるか、そのためにどんな仕組みやルールをつくったらいいかといった研究を計画しています。

本来、従来の車を運転することができない視覚障がい者こそ、自動運転車の恩恵を一番に受けるべきだという思いがあるんですね。

竹中 本場にその通りですね。最近、プロップ・ステーションに仲間入りしてくれた若い子は、全盲で、脳性麻痺で、車椅子なんです。英語が得意でしてね。パソコンや音声装置などをどんどん活用して、私の講演や記事を翻訳する仕事をしてきているんです。

それで、いま彼と私は、車椅子の自動運転で彼がオフィスの中を自由に動けるようにすることを究極の目標にしているんですよ。

高橋 ああ、自動運転で。

竹中 実際、アメリカでは自動運転の研究がすごく進んでいて、キヤリーバッグが自動運転でお客さ

んを飛行機まで案内する技術が考えられているそうです。それは実際にその研究に取り組んでいるIBMの方の講演で聞きました。

で、私思うのよ。目の見えない人が自動車を発明していたら、絶対に事故の起こらない世の中になっているだろうなって。不安定な目に頼って運転する車をつくったから交通事故はなくならない。

高橋 なるほど。その発想、考え方も、私も使わせてもらいます。

竹中 だから、IBMの方と政代さんの研究、それに私たちのようなチャレンジドの支援をやっているチームが加わればもう最強で、全く新しい世の中がつくれるんじゃないかと思うんですよ。

自分がやらねば いったい誰がやる

竹中 政代さんは、もともと医療で患者さんを救いたいというよう大きな志があったのですか。

高橋 いえ、私が医学の道に進んだのは特別な目的があったわけではなくて、両親から「戦争になっても医者は食べていける」「これからは、女性も自分で食べていけるようにしなさい」とずっと言われ

ていたからなんです。

なので、一九八〇年に京都大学医学部に進んでからも、テニスに明け暮れる日々を送り、眼科を専門に選んだのも、「眼科医は夜の呼び出しなども少ないから、家庭と仕事を両立できそうだ」というごく消極的な理由でした。

竹中 そうだったんですか。

高橋 ええ。当時は、医学を通じて、何か大きな仕事をやりたいとは全然考えていませんでした。

ただ、大学卒業後に結婚した脳神経外科医の夫が、一九九五年にアメリカのソーク研究所に留学することになって。その時、私は眼科医として病院に勤めていたのですが、夫を技術的に手伝えればという感じで、幼い二人の娘を連れて留学についていったんです。

そうしたら、当時のソーク研究所は、脳の再生医療の種、材料になる「神経幹細胞」を世界で二番目に発見したところで、これまでの常識を覆す最先端の再生医療研究に取り組んでいたんですよ。

竹中 最先端の研究に触れた。高橋 その時に、私が専門とする目は脳の中核神経の先端にありま